

89 卵巣刺激周期における尿中微量LH動態の解析

山形県立河北病院

小田隆晴, 太田信彦, 木原香織, 沼崎政良

【目的】正常月経周期における簡易 EIA法による尿中微量LH測定の有用性についてはすでに本学会で報告しているが, 今回は卵巣刺激周期における尿中微量LH値の動態を解析し, 排卵予知の可能性について検討を加えた。【方法】測定キットはヒツジより抗LHポリクロナール抗体, マウスより抗LHモノクロナール抗体を作成し, Ist-LHを標準液とした EIAによるものである。対象は排卵障害婦人42名, 50周期であり, クロミフェン刺激周期群(C群)は24周期, ギナドトロピン刺激周期群(G群)26周期である。卵胞計測は経膈プローブで連日測定し, 首席卵胞消失前日を排卵日(Day0)とした。最大卵胞径15mmとなった時点で, 本法で尿中LHの微量測定を行い, 同時にHETT法で尿中エストロゲンを, 血中E₂, LHはRIA法で測定し, 頸管粘液スコア(CMS)も算出した。【成績】本キットの同時再現性は良好で, HCGは100mIU/ml, TSHは0.1 mIU/mlでは交叉反応は認められず, 血中LHともよく相関した($r=0.7743$, $p<0.01$)。尿中LHのDay0の陽性率はC群で100%, G群で61.5%(感度20mIU/ml)であり, G群ではLH高値例のうち半数にOHSSが発生した。陽性日の平均卵胞径はC群19.1mm, G群20.4mmで, 子宮内膜の厚さはC群9.3mm, G群11.9mm, CMSはC群で2.5点, G群で8.8点であった。【結論】本法による尿中微量LH測定は自然排卵周期のみならず, 卵巣刺激周期のうちクロミフェン療法時の排卵予知にきわめて有用であった。ギナドトロピン療法の排卵予知率は満足するものではなくむしろ, OHSSの発生の予知に有用であると思われる。今後不妊症の管理への応用が期待される。

90 自己抗体陽性の反復流産患者に対するプレドニン, 低容量アスピリン療法の検討

埼玉医科大学総合医療センター

斉藤正博, 竹田 省, 石原 理, 飯野好明, 関 博之, 木下勝之

【目的】反復する流産の原因の一つに抗リン脂質抗体等の自己抗体の関与が注目されている。今回反復流産歴を有し, 抗リン脂質抗体症候群を含めた自己抗体陽性例に対してプレドニンと低容量アスピリン療法を妊娠初期より施行し, 抗体価の推移とその臨床成績を検討した。

【方法】2回以上の原因不明の反復流産患者で自己免疫疾患の診断は受けていない自己抗体陽性妊婦11例(未産婦9例, 経産婦2例)を対象とし, プレドニン(20mg/日), 低容量アスピリン(81mg/日)療法を妊娠初期より施行した。

【成績】①治療前の抗核抗体(抗体価: sp80~640倍)陽性例は全例であり, このうえ, さらにlupus anticoagulant(LAC)陽性を伴う症例は1例, 抗カルジオリピン(CL)抗体1gM上昇を伴う症例は2例, 抗SS-A抗体を認めた症例は1例, apTT延長を認めた症例は1例, IgG高値例は2例であった。②治療開始以後, 抗核抗体を含む各種抗体価の減少傾向が認められ, 全例IgGは100mg/dl以下の低下を認めた。③11例中3例は分娩に至り, 8例は初期流産を免れ妊娠経過は順調であり母児共に異常所見は認められていない。

【結論】①自己抗体を有する反復流産症例に対し, プレドニン, 低容量アスピリン療法を施行し, 全例順調に経過しその有効性が認められた。②IgG, 抗核抗体価の減少により妊娠継続が得られたことから, 自己抗体が流産の原因の一つとして関与している可能性が示唆された。